司馬遼太郎全集 50

ひとびとの跫音

評論随筆集

司馬遼太郎全集　第五十巻
第二期第十八回配本　ひとびとの跫音
評論随筆集
定価　一八〇〇円
昭和五十九年九月二十五日発行
著者　司馬遼太郎
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（代表）〇三―二六五―一二一一
印刷所　大日本印刷
製本所　大口製本
製函所　トーシキ
万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します
© RYOTARO SHIBA　Printed in Japan

人とびとの跫音

評論随筆集

司馬遼太郎全集50

司馬遼太郎全集第五十巻

ひとびとの跫音　5
木曜島の夜会　273
評論随筆集　327
年　譜　549
解説　清冽で温柔な感情移入の極致　谷沢永一　561

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　三井永一
題字　中田　功
AD　粟屋　充

ひとびとの跫音

目次

電車　9
律のこと　21
丹毒　36
タカジという名　59
からだについて　73
手紙のことなど　83
伊丹の家　102
子規旧居　116

子規の家計　132
拓川居士　143
阿佐ケ谷　162
服装、住居、あるいは金銭について　183
ぼたん鍋　206
尼僧　226
洗礼　237
誄詩　258

電　車

ひさしぶりで梅田方面へ出かけてみると、地下街が四通八達していたり、おもわぬところに高層ビルができていたりして、自分の頭のなかの地図が古くなっている。

「阪急本社」

というふうに、近所のタクシー営業所にあらかじめ目標を告げ、地図もしらべておいてもらったのだが、いざその付近にきて、運転手も自信をなくしてしまった。まさかデパートのほうではないでしょうね、と何度もきいた。

「それとも電鉄ですか。もし電鉄の阪急梅田駅ならこれよりむこうになりますが」

「本社だけど」

私も何度かくりかえしながら、自信がない。本社といえば要するに事務所のことだろうが、そういう建物——もしくは部屋——はデパートに片寄せて存在しているのか、それとも電鉄の駅の二階あたりにでもあるのか。

「わかりませんなあ。独立した建物なら、こう、なんとかめじるし（看板ということであろう）が出ていてもよさそうなものですがね」

と、運転手は根気よくまわりの建物をながめ、やがてもう一度一周した。そのかいわいはデパートをふくめ、阪急という名を冠した建物が多く、そのいちいちをながめてみても、阪急本社らしいものはない。私がこのあたりにつとめていた昭和三十年代には、このかいわいで阪急と名のつくめぼしい建物はチョコレート色の百貨店の建物一つきりしかなく、こういう複雑に高層化した市街というものはできていなかった。

「われながら田舎者ですなあ」

私とおなじく大阪の東郊に住んでいるこの運転手はそういう詠嘆をしおに、この捜索をうちきってしまった。あとは歩いておさがしになったほうがいいのではないですか、そういって、私を新阪急ホテルの玄関におろした。

ホテルの受付できくと、すこし様子がわかった。まずホテルを出よ、という。教えられたままに長い歩廊を歩いてみた。この長い歩廊についても、はじめて歩いた。柱、床、まわりの装飾などすべてほどよくできていて、おなじ繁華街でも、私が幼いころ、遊び場の北限にしていたミナミの道頓堀などは、これにくらべ、ずいぶん泥くさくなったようにおもわれる。もっとも道頓堀というのは元来、休みの日にあそびにくる丁稚（でっち）のこのみにあわせたようなところがあり、道頓堀を仮りに大阪風とすれば、阪急界隈（かいわい）はもともと大阪ばなれして、おおげさにいえば東京の租界といった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

感じがあったが、これほどまでとはおもわなかった。
歩廊をゆきながら、なんどもたずね、やっと「阪急電鉄株式会社」という金文字の出ている一角につきあたった。

私は、この会社にかつて勤めていた忠三郎さんのことを書こうとしている。こというのは、想い出なのか、事歴なのか、あるいは人間についてなのか、いまのところよくわからない。

昭和五十一年九月十日の朝、忠三郎さんは脳出血による七年のわずらいのあと、伊丹の自宅の近所の病院でなくなった。七十五歳であった。

夜、通夜にゆくと、七年間つきっきりで看病した夫人のあや子さんが、つよい近眼鏡の底にある大きな目を見ひらいたまま、あなた、葬儀委員長をやってよ、そうなったのよ、といった。彼女は、看病中、病人がものを食べないために彼女までが食べなくなり、腕なども唐傘の柄のように細くなり、目が、眼窩のかたちがわかるほどに落ちくぼんでいた。しかし気と声だけはしっかりしていて、大丈夫よ、痩せているだけで、病気じゃないのよ、と自分のことをいった。

すでに五、六人身寄りのひとたちがきていたし、台所で音を立てているのは、忠三郎さんの高校時代の友人の女房であることがわかった。この友人も、食道がんで信州の佐久の病院に入院しており、きょうあすという容態になっている。

「ぼくは、そういうお役目、だめです」
用心ぶかく、しかし切り口上でことわった。私は世間のおとながやる大人くさい役のできない人間で、まして葬儀委員長など、おもうだけでもぞっとした。

私の切り口上に釣られて、あや子さんの言葉も、法廷の証人のようにすこしかたくなった。

「忠三郎なんぞは、戦前は阪急で佃煮売場にいたし、戦後は事業ともいえない小さなしごとをしていて、それが死んだんですから、お葬式もはじめっからこの家でひっそりしたものにしよう、ときめていたんです。来てくださる人もご近所ばかりと思っていたのに、誰がたのんだのか、こまったことに、会場は玉造のカトリック教会の大阪カテドラルという処だというのよ。あそこ、大きいでしょう」

私は、その会場を知らない。

豊臣氏のころ、大坂城の南東の玉造口に細川越中守忠興の屋敷があって、いまも越中町とよばれていることは知っている。やや窪みになっているさびしい町だが、そのあたりに細川ガラシャ夫人の殉節を記念して大きな聖堂ができたということは、ずいぶん前、新聞で読んだ記憶がある。

「椅子の数が、千だったか二千だったか、ともかくもそこへ二、三十人入るだけでは、みっともないというのよ。それはいいとしても、葬儀委員長もないというのはおかしいというの」

私の知識では、葬儀委員長というのは故人の先輩か同輩がやるもので、忠三郎さんより二十一も齢下の自分がやるのはおかしいではないかとこだわってみたが、痩せきっているくせに変に厳然としている相手にそれ以上いう気力がなくなった。

それよりも、この訃報を知らせねばならない。故人は、大酒家であった。それも外酒で、家では飲まない。かつてこの人は、私はむしろ酒はきらいなんです、と洩らしたことがあった。客気で飲むというほうで、七年前に中気で倒れるまで毎夜家へたどりつくのがやっとだったという。そういう飲屋や、飲屋で親しくなったひとびとに報らせるのがいちばんだとおもったが、しかし私は忠三郎さんの行きつけの店は一軒も知らない。そのことを夫人――あや子さん――にきくと、

「それが、私、知らないのよ」

いかにも残念そうにいった。

結局、新聞にたのんで死亡欄の記事に出してもらえるなら、飲屋での仲間たちがこの人の死を知るのではないかとおもった。

私はむかし新聞社にいたころ、よく死亡欄の記事を書かされた。電話機のそばで鉛筆をとってみると、その欄の記事のスタイルをわすれていることに気づいた。むろん忠三郎さんは死亡欄に載るほどの「名士」ではなかったが、正岡子規の養子といえばのせてくれるのではないか。やっと書きあげ、一社ごと社会部の夜勤デスクをよびだして概要をつたえた。

「記事になりますか」

「なりますよ」

と、みないってくれたが、なんだか死者を売りこんでいるようで、変な気がした。

一社だけ、正岡子規といってもどうにも通じない人が電話のむこうに出てきた。私は、子供の子、それに、規則・規律・規格の規です、というように文字までいったがわからず、ついに言葉をうしなっていると、その人は「アア、ソウカ、漱石、子規カ」とつぶやいた。そういう古い人物に養子がいて、しかもきょうまで生きていたのかという時間的な間尺があたまにぴんとこないらしかった。

そのあと八日たち、伊丹の正岡家の通夜の日、薄暗い台所で音をたてていたひとの亭主が、信州の佐久でなくなった。私は忠三郎さんの葬式のあと乗りつけない中央線――信州は東京にむかってひらけていて、大阪からの交通路は多少の不便がともなう――の夜汽車に乗って佐久の火葬場へゆき、そのあと遺骨と一緒に東京へ出、すぐ大阪にもどると、ほどなく私事だが――なにが私事だかわからないが――私自身の父親が死んだ。数珠玉がつながったように、一週間から二週間おきに、そういうことが相ついだ。

正岡忠三郎さんが阪急に就職したのは、昭和二年であっ

た。

金融恐慌が進行しているまっさいちゅうで、就職も容易でなかったろうとおもわれる。たまたま職をえて東京にもどり、親戚の婦人にその旨報告にゆくと、

「けっこうじゃありませんか、こんなご時勢にたとえ半給でも」

といわれた。当時、阪急という社名は東京ではほとんど知られておらず、この婦人の場合、忠三郎さんが半給——給料半額——でやっと就職にありつけたと信じた。

「半給で不足をおっしゃってはいけませんよ」

婦人は、忠三郎さんを、親戚中で評判の怠け者であるとおもっていた。

忠三郎という人はごく自然に自分をふたいろに使いわけていた。友人や同僚にたちまじったり、上役の前などでは不敵で直情的な言動を好んだが、この婦人のような、いわば世間のおとなの前に出たときは、育ちのいい坊やのようにお行儀よくふるまった。この場合も、相手の思いこみを修正するのがわるいとおもったのか、とびきり大きな体を折りまげ、肉づきのいい膝をそろえて、ありがとうございます、と頭をさげた。忠三郎さんの実母はしつけがうるさかったという。反射のようなものかもしれない。

「どういうお仕事でございますか」

婦人はたずねた。

忠三郎さんは、頭も大きかった。顔は丸顔の色白で、唇だけは伊予顔ともいうべき特徴があり、やや厚めで、つよく結ぶと、上唇が嘴のようにわずかに下唇にかぶさってふしぎな愛嬌があった。

「電車の車掌でございます」

婦人は意外におもったのか、それ以上はたずねなかった。

忠三郎さんの養家も実家も東京だったし、東京に友人が多かったが、それらの人々のあいだで、忠三郎さんが大阪へ行って車掌をしているという噂が、その後根づよくのこった。友人たちのたれもが、この人を、ほとんど伝説的なまでに不羈の人としていたし、およそ世間にあたまをさげるような人柄ではあるまいとされていた。それだけに、電車が発進停止するごとに大声を出しつづけるそういう職業とこの人とがうまくむすびつかなかった。

阪急本社に広報課というのがあり、Kという若い人がいる。あらかじめ電話で忠三郎さんのことを言い、昭和二年ごろに入社したひとはもうたれもおられないでしょうね、というと、その翌年の昭和三年なら監査役のMがそうなんですが、はい、毎日出社しています、ということだった。

私は、とりあえず若いKさんを訪ねようとしている。むろんKさんはおそらく忠三郎さんが退社（昭和十八年）したころに生まれているかどうかという齢だけに、人も名前も知るよしがない。

Kさんとは初対面だった。しかし親切にも忠三郎さんの

「社員調書」というのを写してあとで送ってくれた。「百貨店のほうの人事に保存されていたんです」ということだったが、ざっと四十年ばかり前、中途で退社した従業員についてもそういうものが保存されているのかとおもい、意外な感じがした。

最初の欄に、生年と入社の年月日それに原籍が書かれている。原籍は松山市である。保証人の欄は二人ぶんマスがあるが、なにも書かれていない。紹介者という欄もある。ここも空白のままであった。学歴の欄に、大正八年東京府立第一中学校第四学年修了、同十三年三月第二高等学校理科甲類卒業、同年四月京都大学経済学部入学、昭和二年三月同学部卒業、とある。

「辞令」という欄がある。

その欄での数字は壱、弐、参というように、公文書や証文用につかわれた字画の多い漢字で、それだけで大正時代の街頭写真を見るような古色が感じられた。

入社の日は昭和弐年四月拾参日で、「見習員ニ採用、運輸課勤務ヲ命ス。月手当六拾五円」。見習社員とよばないのも言語風俗上おもしろい。法律上、社員というのは株式会社の株主、社団法人の構成者をいうことばで、その後（といってもそれがいつからであるのか私にはよくわからないが）世間一般に、会社員ということばから、従業員を社員とよぶようになった。ともかくも、見習員になった。

見習員に採用されてから一カ月あまりたつと「車掌見習ヲ命ス」とある。さらに二カ月たって、「車掌ヲ命ス」とつづく。

監査役のMさんは、細おもての役者顔で、たえず絹のようにやわらかい微笑をうかべ、物言いも物腰も、上方の古い商家の老主人といった感じのひとだった。

「忠三郎さんは……左様でごわりまッなあ、私が電車に乗りましたときはもうえらい人で」

およそ忠三郎さんのにおいとはそぐわないことばかとおもわれた。

「監督さんでございました」

「監督さんといいますと……」

私はきいてみた。誰でも一年ほどたつと駅の助役見習などをする。そういう職のことを電車会社では監督さんとよんでいました、とMさんはいった。

「そういうわけで、お互いかけちがっておりますうちに、梅田駅前のマーケットが百貨店になりまして、忠三郎さんは電車からそっちのほうに参りましたから、存じあげていると申しましても、ほんのすこししか……」

Mさんの話しことばは良質な上方弁で、ほとんど古典的といっていい。通鼻音やサイレントが入り、文字にこの気分を写すことは不可能で、私は耳にこころよいまま、内容をききおとすほどにぼんやり聴いていた。ときどき京都弁が入ったのは、父君が銀行員で、四条烏丸角の支店におら

れたときに幼少年期を送ったからだという。中学時代は大阪の天満に住み、高等学校は京都であった。それも理科だったというから、「それではMさんは大学は工学部の電気工学かなにかだったんですか」ときくと、

「それがもう」

と、閉口したような表情をつくった。

「理科の学問は私にはむずかしゅうございまして」と笑って、

「どうにもなりませんものですから大学は経済のほうに」

さざなみだつように笑っている。瑣末なことながら、前掲の「社員調書」のなかの忠三郎さんの履歴に似ているようで、Mさんへの親しみが増した。

金融恐慌と慢性的不況が、Mさんの入社時期もつづいていた。小さな銀行で取付けさわぎが頻発し、この前年――忠三郎さんが入社した昭和二年――の新聞や号外を繰ってみても、物情騒然としている。三月には東京渡辺銀行、つづいて貯蓄銀行が休業し、四月十八日付の号外では台湾銀行の休業が報じられたりしている。当時京都で学生だったMさんも、四条烏丸の角にあった蔵造りの財閥系銀行支店に朝から取付けのひとびとが列をなしてならんでいるのを見てショックをうけたという。

Mさんは阪急に就職がきまると、ゼミの教授に報告に行った。ほとんどの学生がまだ就職がないという状態だったから、あなたが決まったということはなるべく口外しないほうがいい、と教授から注意された。

当時、四歳だった私に、世間の様子の記憶があろうはずがないが、ただ三十四銀行とか愛国銀行などというその後あまり見かけない銀行名を幼児風景としておぼえていることからみても、取付けさわぎというのがどれほどのものであったかについて、かすかに想像の手がかりがある。

ともかくも、Mさんは、父君が銀行員だったからあのしごとは大変だとおもったという。

「ですから銀行には行く気がしませんで……」

だからといって阪急をえらんだということについて、それも個人的理由ではなく、時代感覚というものが、聴き手の私の感覚のなかにまだ十分には入って来ない。私が当時を臆測する感覚では、そのころの阪急というのはわざわざ大学を出て入るような会社だったのだろうか、ということであった。私は歴史に取材した小説を書いてきたためについこういうことが気になってしまう。

この質問をうけて、いままで動いていたMさんの表情がちょっと白っぽくなった。質問の意味がわからないという感じだった。その表情をみて、私なりに、時代のにおいを嗅いだ気がした。

あるいは、以下のようなことかもしれない。

すでに大正期に準備された前駆的な大衆社会が、昭和に入ったころには薄手ながらも耕地面積をひろげている。私にとって実感ではわかりにくい歴史時代であるこの時期を、

つい大ざっぱに明治の延長のようにおもってしまう。資本主義が未発達で企業もすくなく、それとは別事情ながら大学出が多少の意味をもっていた時代と、大正期を終えた昭和二年とはむろん歴史事情が異なる。すでに当時の阪急に入るということは、就職する青年にとって十分ありがたいことだったらしいのである。

しかしなぜMさんは電鉄をえらばれたのだろう。忠三郎さんとかかわることだけに、このことをきいてみると、Mさんは急におどけ、上体を横にまげて、

「私の場合は、こどもとおなじですねん」

といった。こどもが電車好きであるように、という。その趣味が大学を出るころになってもつづいていて、

「もう、電車に乗りとうて」

だから電鉄に入った、という。

いかに少年のころ電車に乗ることが好きだったかということも、ついでに話された。

Mさんの少年期の住まいは天神橋のちかくだから天満に始発駅をもつ京阪電車の雄姿には幼いころからなじんでいた。

「中学のときは南海電車に乗りました」

と、指を折るようにしていわれた。堺の浜寺に海水浴にゆくためである。当時、南海電車はそういうわけで夏場に水泳着をもった乗客が多かった。ついでながら阪急ができたとき、乗務員の訓練を南海と阪神に委託した。

奈良へゆく大軌（だいき）（近鉄）ができたときはわざわざ乗りに行ったという。百科事典によるといまの近鉄の奈良ゆきの電車の会社の創立は明治四十三年である。Mさんの小学生のころであろう。Mさんの記憶では、架線から電気をとる集電装置がパンタグラフでなかった。

「まだ、市電のように、ポールでした」

うれしそうにいわれた。蝶好きの少年がめずらしい蝶を標本にして保存するように、Mさんにとってポールの時代の近鉄奈良線の電車に乗ったことは想い出のなかの宝もののようであった。

阪急の場合、箕面（みのお）有馬電気鉄道という名で梅田から箕面まで最初に電車が走ったのは明治四十三年だが（当時の新聞に開通の日の試乗記が出ている）、経営的には昭和に入ってもまだあやぶまれていて、いつつぶれるかといわれていたという。

この当時、大学出は、やがて「書記」というものになるのだが、入社早々は全員、運転手か車掌という現場につかされた。このやりかたは、阪急が最初だったという。

「私は、運転手がやりとうごわしてな」

Mさんは、車掌はにが手だった。

「車掌でございますと、人前で突っ拍子もなく大きな声を出します」

だからはずかしかった、という。ところが近眼だったた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com